

# ジャワ島地震

国際緊急援助隊医療チームに参加して



JDR診療サイト全景



最大の被災地パントウールの災害対策本部にて



診療サイトを訪れた被災者



巡回診療で訪れたNgrancah村の倒壊家屋



学生ボランティアの活躍



被災者の診療にあたるJDR医師



すべての活動を終えて

# インドネシア ジャワ島中部地震 国際緊急援助隊医療チームに参加して

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 国際緊急援助隊事務局

野村 留美子

始まりは、突然に

「ジャワ島の地震で医療チーム本隊を派遣することになった」

上長からの電話で寝ぼけていた目が覚める。続いた言葉で受話器を落としそうになる。

「野村にも行ってもらおうと思ってる。すぐに荷物まとめてオフィスに来て」

「は、はい、すぐ行きます……」

とうとう来たか、この時が。電

## プロフィール

二〇〇一年、総合政策学部政策科学科卒業。在学中はカールトン大学に交換留学したほか、三年間にわたり本誌の学生記者を務める。卒業後マイクロソフト(株)に入社。営業やマーケティングに携わった後、政策企画本部にて社会貢献活動の企画・実施やCSR(企業の社会的責任)イニシアチブの立ち上げにかかわる。今年一月にJICAに転職(社会人採用)。国際緊急援助隊事務局に配属され、現在に至る。趣味は海外旅行で、これまでに二六カ国を訪れた。



話を切った後も、ちよつとドキドキしている自分をまず落ち着かせる。食べかけていた朝御飯を急いで胃袋に詰め込み、これまでの人生で一番早く荷物をパッキングし、家を飛び出した。

## いざ出発!

翌朝、私は成田空港にいた。

朝九時半、空港内の特別室にて結団式が始まる。小さな四角い部屋に、医療チーム本隊の隊員一七人と、外務省やJICAの幹部、

JDR (Japan Disaster Relief team 国際緊急援助隊) 医療チームを支援してくださっている先生方、そしてマスコミが詰め掛けていた。

「昨日七人の調査チーム(先遣隊)が出発し、無事現地に着いたようです。しかし一方でインドネシア政府は非常事態宣言を発令しており、予断を許しません。皆さんが無事に帰ってくるのが一番の目標ですので、くれぐれも健康には気を付けて、日ごろの成果を発揮してきてください」

これから派遣される隊員にメッセージが送られる。スピーチを聞く隊員の顔も緊張気味だ。一七人全員が、ポケットがたくさん付いた紺色のそでなしJDRベストを身にまとっているせいか、独特の雰囲気室内を漂う。

それにしても、「国際緊急援助隊 JAPAN」と背中大きく書かれているこのジャケットは、よく目立った。結団式が終わってから、出国審査を通り、機内に入り込むまで、一団はテレビカメラと周りの視線を浴び続ける。「ああ、本当に日本の代表として行くんだなあ

……」。突如自分が置かれた境遇の変化に戸惑いつつも、自分のベストを尽くそう、そう思った。

転職、そして緊急援助の世界に

一年前だったら、自分が突如インドネシアに派遣されることになろうとは想像もしなかっただろう。何しろ昨年末までずっと、IT業界にいた身である。

ただ大学時代に国際政治を勉強していたこともあって、いずれは国際協力分野で仕事をしたいと思っていた。そこで昨春秋、JICAの社会人採用試験を受け、合格。今年一月に入構し、最初に配属されたのが国際緊急援助隊事務局だった。

JICAで一番小さなこの部署は、職員・出向・派遣を含め全部で一六人。海外で大災害が発生すると、昼夜、休・祝日問わず呼び出され、それからしばらくは平日・週末関係なく夜遅くまで仕事に追われるという特殊な部署である。体力勝負？のためか女性職員の配属は珍しいらしく、「一九八七年の事務局創設以来、まだ三人目」と

のことだった。

勤務を開始して以来、主に物資供与を担当し、今年一月に発生したボリビアでの洪水や、三月のフィリピン・レイテ島での地滑り災害、四月のイラン地震に際してテントや毛布などの緊急援助物資の手配を担当してきた。しかし、五月二十七日、朝五時五四分に発生したジャワ島中部地震は、私が初めて体験する「チームを派遣する災害」となった。

JDR医療チーム

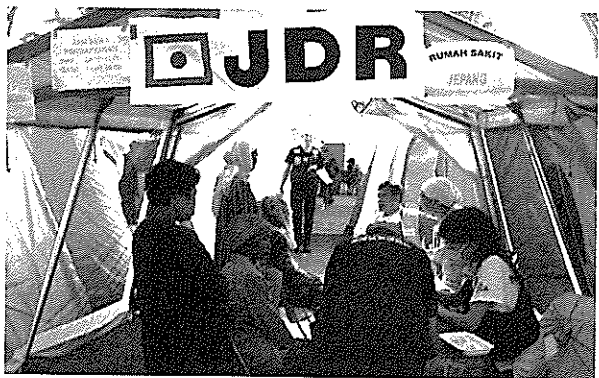
今回派遣されたJDR医療チームは、四つある国際緊急援助隊のチームの一つである。ほかには救助（レスキュー）、専門家、自衛隊チームがあるが、医療チームの歴史が一番長く、派遣実績も四四回（今回の派遣を含む）と最も多い。もともとは一九七〇年代後半、インドネシア難民が隣国に流出した際、日本政府が始めて医療チームを派遣したことがJDR医療チーム発足のきっかけだった。ただし通称PKO法が一九九二年に施行されて以来、紛争に起因する災害

（難民を含む）への対応は自衛隊が行うことになり、以来、JDRは主に大規模な自然災害に対して派遣されている。

医療チームは、通常二一人から構成され（今回は最終的に二五人）団長を筆頭に副団長、医師、薬剤師、看護師、医療調整員、そして業務調整員から成る。医療関係者は全員ボランティアだ。現在JDR医療チームに登録しているボランティアは七六〇人（二〇〇六年七月三日現在）。大災害が発生し医療チームの派遣が決定すると、この登録者にファクスやメールで一斉に案内が流れ、参加者を募る。そして、参加意思を表明した登録者の中から経験者・未経験者をバランスよく交ぜる形で選抜し、チームを結成している。活動期間は二週間だ。

こう書くと、「自分は医療関係者じゃないから参加出来ないな」と思われそうだが、医療調整員の中には医療関係者以外の人もいる。医療知識があれば有利ではあるが、受付対応をする人も必要なため、被災国の言語や文化に通じていれ

診療サイト受付の様子



四人派遣された。現地で活動する際に、医療活動以外のことすべてを取り仕切るのが業務調整の仕事である。診療サイトの選定からテナントの設営、移動のアレンジ、必要物資の現地調達、セキュリティの確保、現地政府や国際機関・NGOとのコーディネート、本部への連絡、広報活動……と業務内容を挙げれば切りがない。

医療チームの活動期間は原則二週間と決まっているが、その間、医療チームのメンバーがスムーズに活動出来るような「場」を整えることが私たちの役割である。こうしたロジスティックスは活動の成否にかかわるほど重要であると緊急援助の世界でいわれている。

例えば、適切な診療サイトが確保出来るか否かで、その後の診療者数も、隊員のセキュリティも、日本・現地メディアへの露出も大きく左右されてしまう。こうした重要なロジを回すために、業務調整員にはJDR事務局から経験が豊富な人が必ず一人は派遣されている。今回はこの道六年の老友さん。初めてのミッション参加だっ

た私にとって頼りになる存在であると同時に、色々なことを学ばせてもらった。

ジョグジャカルタ特別州パントウル県へ

一団を乗せた飛行機は一路ジャカルタへ。そこで一泊し、翌日、国内線で被災地ジョグジャカルタ特別州に向かう。ジョグジャカルタ空港は被災して一時クローズしていたが、運良く私たちが着いた日に復旧し、降り立つことが出来た。そこからすぐに、最大の被災地であり先遣隊が診療サイトを確保したパントウル県にバスで向かう。

「ほら、あの建物、見て」

バスで移動中も、隊員は街の風景にくぎ付けた。一階部分がつぶれた建物や、崩れて歩道に散らばったレンガ塀を複雑な思いで見詰める。しかし、すべての建物が被災しているわけではない。逆に無きで残っている建物の方が多い印象だ。開いている店も多く、道路に車も多い。日本をたつ時点で、被災者数千人以上（六月八日現在

のインドネシア社会省発表では五七一人）と聞き、阪神・淡路大震災のような状況を予想していた私は、「被災者はどこ？」というのが正直な感想で、ほかの隊員も同じ感想を持ったようだった。

一時間ほどしてパントウル県内の目抜き通りに到着。そこには一日早く着いた先遣隊が立てた簡易テントが数戸立ち上がり、既に診療を開始していた。テントの前には既に診療を待つ患者の列が出来ていた。

ムハマディア病院の光景

到着後すぐに、診療サイトのすぐそばにあるムハマディア病院を見学しにいった。パントウル県最大というだけあって、三、四階まである比較的大きな建物だったが、被災して壁のあちこちに亀裂が入り、建物わきの塀は崩れ落ちて、駐車してあった救急車が傾いていた。

案内されて中に入ると、院内は患者であふれ返っていた。室内に入り切れなかった患者が廊下にあふれ、毛布の上に寝転がっている。中には点滴を付けたまま寝転がっている患者もいる。付き添ってきたのだから、家族らしい人も一緒に座り込み、見守っていた。建物の中を抜けると、そこには簡易テントがあり、廊下からもあふれ出した患者がその中で横たわっており、痛々しい。

初めて、被災地に来たという現実感がわいてきた。

「市内の被災状況を見て『どこに被災者がいるんだろう？』と想っていたけれど、この病院に来



ジョグジャカルタ市内の被災建物

て被害の大きさを実感した」と、前述の大友さん。私も同感だった。私たちがまだ足を踏み入れていない奥地に、多くの被災者がいるに違いない。

診療サイトを選定する際、州政府からこの病院の近くで活動してほしいという要望があったのだが、この病院とはその後二週間にわたって協力関係を保ち続けた。例えば、私たちJDR医療チームは携行機材が限られており、応急処置が主となるため、手術を必要とするような重度の患者には対応することが出来ない。そのような患者



ムハマディア病院にあふれる患者たち

が診療サイトに来た時は、ムハマディア病院は後方支援病院として機能し、患者を受け入れてくれた。治安と生活環境に恵まれて

私たち本隊が到着したその日のうちに、十字型の白い大型テントを全員で立ち上げ、医薬品や医療器具などを運び込んだ。翌日から本格的に診療開始。診療時間は午前八時半から一二時、一時間のお昼休みを挟んで午後は一三時から一七時とした。

この診療時間はどの医療チームの派遣時にも決まっているわけではなく、日照時間や活動地域の治安などを考慮して決められる。早く日が沈む場合は安全対策上、早めに活動を切り上げ暗くならないように宿泊場

所まで戻る必要があるし、活動地域の治安が悪い場合、テントの中の医療器具が盗まれる可能性がある。毎日片付けて宿泊場所まで持って帰らなければならず、その撤収作業に掛かる時間も考慮しなければいけない。しかし今回の活動地域、ジョグジャカルタ特別州は驚くほど治安が良く、比較的長く診療時間を持つことが出来た。私たちが宿泊したのはジョグジャカルタ市内のホテル・ガルーダ。そこから約三〇分から四五分掛けて診療サイトがあるバントゥール県にバスで行き、夕方には同じ道を戻るといって毎日が始まった。成田出発時はテントでの野営も覚悟していたので、ちよつとホッとしたり。昨年一〇月のパキスタン地震の際に派遣された医療チームは、周囲に宿泊施設がなく完全な野営で、昼夜の激しい寒暖の中体調を崩した隊員が多かったと聞いていたからだ。

治安と、生活環境。この二つが良好だったおかげで、今回のミッションは非常に順調な滑り出しを見せた。もつとも先遣隊は、「最初

三日間の合計睡眠時間が八時間で、死ぬかと思った」というくらいハードなスケジュールだったようだし、診療テントの中も連日三二℃を超え、脱水症状を起こしかけた隊員もいた。自分も活動開始数日後、脱水症状の前触れかポットとなり、「これはやばいかな」と思ったことがあった。日本とは異なる気候風土の中での緊急援助活動には、体力と、自分自身のコントロールが不可欠だと痛感した。

#### JDR医療チーム始動

私たちの十字テントは、大型でユニークな形をしているだけでなく、設置場所が市内中心部であったこともあり非常に目立ち、「日本人医師がはるばるやってきた」という物珍しさも手伝って、設置した翌日から多くの患者が詰め掛けた。日本の医療チームは優れた診療をやってくれるらしい」という口コミも手伝って、その数は増え続け、平均して約一二〇人の患者が連日サイトを訪れた。

来たのは患者だけではない。日本、インドネシア両国のマスコミ

もテレビ、新聞、雑誌問わず押し寄せ、活動を取材してくれた。今回は本当に取材が多く、ホテルに帰ってNHKの衛星放送を見ると、医療チームの活動が紹介され、上司を始め見知った医師や看護師が映像に出てくる、ということがよくあった。

また今回は医療チーム始まって以来初のNHK衛星中継があり、隊員の医師が診療サイト前で日本のニュースキャスターの質問に答えるという機会もあった。日本から遠く離れたこの土地で、多くの



テント内で診療を行う丹野医師

ニュースが作られていくのを横で見ながら、現実感があるような、ないような不思議な気分を味わった。

何にしても、マスコミが医療チームの活動を総じて好意的に取り上げてくれたおかげで、医療チームのサイトは毎日訪問客でいっぱいだった。報道を見たり聞いたりして来た患者がいたのはもちろん、インドネシア政府の関係者や、他の援助関係者もたくさん視察に訪れた。また、活躍ぶりを聞き付けたジャカルタの日本企業や日本人団体から、「日本人として誇りに思う。頑張ってください」と差し入れや支援の申し出があったこともうれしかった。

インドネシアは世界の中で一番親日家が多い国だそうで、「日本は好きですか」というアンケートに「好きです」と答える人の割合が世界一高い(八五%)のだそうだが、今回の派遣はその友好関係を更に深める一助になったと思う。

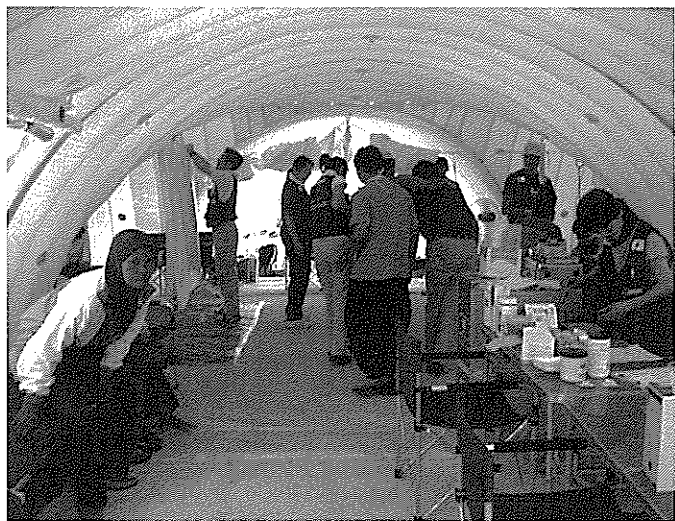
#### 初の本格的な巡回診療

今回のミッションの特徴は色々

あるが、その一つは初めて本格的に巡回診療を行ったことだ。バントゥール県を拠点に、車で三〇分から一時間くらい行った所にある周辺の村に医師と看護師がペアで巡回し、処置を行った。重症の患者がいた場合は、本人の意思を確認したうえで近くの病院に搬送した。こうした時は、緊急時の車両を手配してくれるIOM(国際移住機関)などの国際機関との連携が役立った。

私も巡回診療に同行し、幾つかの村を訪れたが、そのほとんどの村で九〇%の建物が程度に差はあれ被害を受け、死者が出ていた。

「この村は、村長さんが地震で亡くなってしまったために、緊急援助物資の配分が受けられない状態になっているみたいだ。村長の個人的な力が大きいこの地域じゃ、村長の代理では影響力がないんだ



十字テントの内部

よ……」

ある村で、一緒に同行していたJICAインドネシア事務所の人が、村人の話を訳して教えてくれた。巡回には地元の警察が同行していたので、この村の状況が伝わり、事態は改善しそうだった。

巡回診療で診た患者のほとんどは、近くの病院で応急処置を受けていたものの、病院に大勢の患者



が詰め掛けたために再診してもらえない状況だった。それでも私が同行した富岡副二医師（副団長。医療法人財団池友会福岡和白病院所属）は「意外と応急処置がしつかりなされている」と感心している。「医療器具がほとんどない中で、ここまで応急手当てが出来る医師は逆に日本に少ないだろう」。

医師と看護師があうんの呼吸で患者の傷を処置していく様子を、村人が囲んで興味深そうに見詰める。特に子供たちは興味津々だ。地震で怖い思いをしたに違いないが、そのひとみには恐怖の影よりも、純粋な光が残っていたのが意外であり、救いでもあった。

今回チーフナースとして参加した石井美恵子看護師（北里大学大学院看護学研究科所属）は「被災地にすぐに駆け付けることで、被

災者に「あなたたちは見捨てられていない」というメッセージを送ることが大切」と言われていた。そうすることで被災者が精神的な傷から立ち直ることが出来る。

診療サイトでの活動はもとより、奥地まで分け入り巡回診療を行った日本人医師と看護師の姿は、きつとそうしたメッセージを伝えることが出来たに違いない。

### 現地参加ボランティアの活躍

二つ目の特徴は、現地参加ボランティアの活躍だ。

ジョグジャカルタは日本でいうと京都のような地域で、文化のレベルが高く、人々も誇り高い。歴史も古く、ポロブドゥール遺跡のように世界遺産に登録されている遺跡もある。歴代の政治家も多く輩出しており、第二代大統領スハルト氏や五代大統領のメガワティ氏も同地の出身だ。

教育の水準もインドネシアの中では高い。ジョグジャカルタにあるガジャマダ大学は、さしずめ京都大学というところだろうか。同大学は一九四九年に創立されたインドネシアで最も古い国立大学で、一八学部を有する総合大学。学生数約四万人、教員数約二〇〇〇人のマンモス大学だ。

その大学で学ぶ日本人留学生数人が、診療活動を開始して一週間を過ぎたある日、サイトに訪れた。「医療の知識はないけれど、インドネシア語は出来ます。自分たちに何か出来ることをさせてください

い」。一年間の交換留学で来ている学生三人と、一年間企業派遣で留学している方一人だった。

学生たちの申し出をありがたく受け入れ、翌日から本格的に活動を開始してもらった。インドネシア語が出来るので、主に受付前での問診を行ってもらった。たまたま初日は金曜日。イスラム教の信者にとって大切なお祈りの日で、インドネシア人通訳約六人は全員、お祈りのためお昼に抜けていた。その間日本人学生たちが通訳として活躍。診療サイトでは、問題なく活動を続けることが出来た。もちろんこの時だけでなく、学生ボランティアは最後まで熱心に活動を続けてくれた。その姿は医療チームのメンバーにも、患者にも良い影響を与えてくれた。

「地震が起きた直後は、街の人たちが皆『津波が来る！』っていうデマに踊らされて、パニックになり、高い所に逃げようとして必死になったんです。自分も、『ジョグジャカルタは内陸だから、こんな所に津波が来るはずない』と最初は思ったんですが、周りの雰囲気

のまれて、一緒になって逃げていました。気付いたら一人になっていて……」

学生の一人、照屋貴子さんは被災直後の経験を語ってくれた。

「逃げていた時は本当に怖かったです。恐怖が去った後も、人々がパニックを起こしたことが嫌になってしまっって、一時は日本に一時帰国しようか本当に迷

いました。でも、インドネシアの人々に本当にお世話になってきたから、その恩返しをしなきゃって思い直したんです。そんな時、日本の医療チームが来ていることを知って、日本人の自分しか出来ないことがそこであるんじゃないかって思っって。それで来ました」

医療チームのメンバーの中にも、青年海外協力隊員としてインドネシアに二年間赴任したことがある人が数人いた。その中にも「今の自分があるのはインドネシアの人たちのおかげ。その恩返しをした」と話してくれた人がいた。インドネシアに恩返しをしたい、という気持ちは今回のボランティアに共通していたかも知れない。

日本人留学生在が活動してまもなく、インドネシア人医師もボランティアに加わった。ラマ先生である。先生は



受付を手伝う学生ボランティア（左が照屋さん）

インドネシア人だが、日本の大学の医学部を奨学金を受けて卒業。現在は茨城県の病院で勤務されているという大変優秀な方だ。もちろん日本語も堪能である。

母国での大地震に心を痛めていたところ、勤務先の病院から「しばらく帰国して、被災地で支援活動をしてきたらどうか」と勧められた。在日インドネシア大使館にレターまで書いてくれたそうだ。帰国後、最初はインドネシアの病院で活動していたが、日本で医療を学び仕事もしていた先生は、JDR医療チームのことを知り、より自分の力を生かせるのではないかと考え、私たちを訪ねてくれたのだった。インドネシア語、日本語両方に通じ、医学の知識もあるボランティアなどすごい。申し出をありがたく受けた。

### 復旧・復興支援調査チーム

三つ目の特徴は、復旧・復興支援調査チームの二人が早い段階から合流したことだ。このチームのミッションは、緊急支援に続く復旧・復興支援のニーズをいち早く

調査し、早急かつスムーズな復興につなげることである。緊急時から復旧・復興期への切れ目のない援助については、JICAでも重要性が認識されていたが、今回具体的な形で早期に実現することが出来た。

調査チームの二人はJICAの職員。活動期間中、私たちが診療サイトで活動している間、政府の関係者や被災地を精力的に回って情報収集を行っていた。その一週間後、六月五日には新たに調査団一二人が派遣。日本政府としてはジョグジャカルタ市周辺で実施中、または実施予定の初中等教育、水道、保健医療の三分野のJICAプロジェクトを活用した支援を行う方針だったが、その具体的な内容について早い段階でインドネシア政府に表明することが出来た。ここまで早く、具体的に支援表明をしたのは先進国の中でも日本以外になく、先方政府から非常に感謝されたという。

こうしたスムーズな支援表明につながった背景には、日本とインドネシアの緊密な関係はもとより、

それを裏付ける人材の存在があったと思う。調査チームの中にはインドネシア語に非常に堪能な人もおり、現地の関係者とのコミュニケーションの問題がないどころか、情報収集や交渉に当たって親身になつてもらえたのではないかと思う。また、今回のミッションを通じて多くのJICAインドネシア事務所スタッフにお世話になつたが、皆おしなべてインドネシア語が流ちょうで、現地の政治経済や文化に精通していた。こうした人材があつてこそ、効果的な支援が実現するのだと心から思った。

### 被災地といつてもさまざま

JDR医療チームでは、時に二次隊を派遣することもある。現地に強い医療ニーズがあり、現地政府の要請があることが条件である。しかし今回は早い段階からその可能性を見送っていた。理由は、州政府とムハマディア病院を始めとする現地の医療施設の復旧の早さである。

もともとジョグジャカルタ特別州は自治能力が非常に高い州だ。

ここは、単なる州ではなく「特別州」である。スルタンが州知事として統治するインドネシアで唯一の州だからだ。スルタンは現地の民の尊敬を集めており、スルタンもそれにこたえているという。また前述したように教育のレベルが高く、学生も多いので、被災後は学生たちがいち早く結束して支援活動を行った。

また、この州は良くも悪くも自然災害が多い土地だ。医療チームが活動している間に噴火したムラピ火山があり、南部では鳥インフルエンザの感染例が報告されている。州政府はこうした災害に備えて、日ごろから対応を検討していたらしい。もちろん災害対策において万全ということはないのだから、比較的緊急時を早く脱し、復旧・復興フェーズに移行出来た背景には、こうした要因があつたようだ。

前述のムハマディア病院も、早い段階で機能を回復し、活動期間の終わりごろには廊下に寝ていた患者は姿を消していた。自分たちの土地は、自分たちで

復興する。そうした強い意志が感じられた。途上国の災害支援という点、「被災者を助ける」ことばかりに視点が行ってしまい、現地の人たちに自力で立ち上がる力があることを忘れがちだが、誇り高いジョグジャカルタの人たちは、「復興支援は、地元の人々のオーナーシップが基本で、海外の援助はそれを支援するのがかき」ということを教えてくれた。

### 患者からの「ありがとう」

診療を開始してから、あつという間に一〇日間がたった。診療最終日となったその日は多くの患者が詰め掛けた。その日だけで、初診・再診合わせて一八〇人上った。

中には二、三時間も掛けて遠方からやってきて、「本当にありがとう」とお礼を言いにきてくれた元患者さんがいた。またある患者さんは、ポケットからポロポロの紙を取り出し、看護師に渡すとお礼の言葉を残して帰っていった。「本来であれば家まで招待し、お礼を述べたいが残念ながら被災しそ



報告書作成中の筆者

したことも出来ない。ただ感謝の気持ちでいっぱいです」。その手紙には、そう書き記してあつた。皆、胸が熱くなった。

### ムハマディア病院への供与式

診療活動を終えた翌日の六月八日は、皆で十字テントを畳んで、診療サイトをクロージズした。皆が汗を流している間、私はちょっと離れた所に立てたテントの中でパソコンとにらめっこ。何だか感じが悪いが、その日に執り行う供与式で現地政府に渡す英文の活動報

### 告書を作成していた。

供与式では、十字テントを始めとするテントや、医療器具をムハマディア病院に寄贈することになつていった。これはJDRの慣習で、活動終了後はほとんどの機材を現地政府に供与して帰ってくる。被災地でこれらの機材を診療活動に役立ててもらう、というのが主な目的だが、すべて持ち帰ると高額な輸送費が発生するため、寄贈した方が費用対効果があるという現実的な事情もある。

供与式は夕方から、インドネシア保健省の大臣の参加の下行われた。医療チームからは、富岡副団長がこれまでの活動の簡単な報告をし、インドネシアからは大臣及

び政府担当者がお礼のスピーチ。続いて資機材供与の覚書に大臣と副団長が署名した。式は十字テントを立てていた場所に簡易テントを二つ立てただけの簡素な場所で行われたが、それまで私たちの活動を応援してくれた地元の人に見守られ、最後を飾るにふさわしいセレモニーになった。インドネシアの夕日が、誇らしげな、でもどこか寂しげな隊員の横顔を照らしていた。

### ミッションを終えて

翌日私たちはジャカルタ経由で日本に帰国した。帰国した医療チームを待っていたのは空港での解団式。NHKのカメラが回る中、

結団式に参加された方とほぼ同じ方々から、ねぎらいの言葉を頂いた。

「皆さんの活動は毎日のように

報道され、日本でも皆さんの活躍を手取るように知ることが出来ました。初の本格的な巡回診療や、復旧・復興支援調査チームとの連携による切れ目のない支援、そして学生ボランティアやラマ先生の参加など、多くの新しい試みがあつたミッションだつたと思います。本当にお疲れ様でした」

スピーチに耳を傾けながら、二週間前の結団式で心細い思いをしていた自分のことを思い出した。一緒に出発した医療チーム本隊には一人も知り合いがおらず、医療関係者のボランティアの方々と、どう接すれば良いのか心もとなくなつた。しかし二週間の濃縮された日々を共に過ごした今、この部屋にいるメンバーと不思議な連帯感が生まれ、それが安心感と自信につながつていった。

また今回のミッションが成功裏に終わったのは、メンバーの活躍はもとより、国際緊急援助隊事務局本部やJICAインドネシア事務所を始めとする関係機関の手厚いサポートがあつたからこそである。本当にびっくりするくらい、

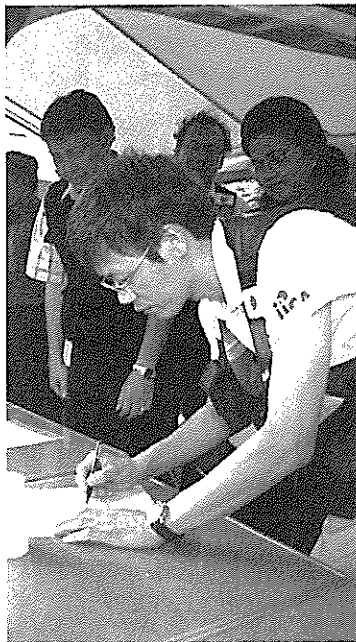
色々な局面で支援してもらつた。これがJICAの底力なのかも知れない。

転職して初めての海外出張となつた今回の派遣だったが、JICAの組織的なネットワークと人材の豊富さを実感する貴重な体験になつた。自分が次にサポート側に回るようになった場合、同じように精いっぱいサポートしたい。それがきつと被災国への効果的な支援につながるだろうから。

今回のミッションを通じて得たさまざまな経験や出会いを胸に、今日も、世界のどこかで起きるかも知れない災害に備える日々を送っている。

注 本稿は個人的な見解に基づくもので、JICAの意見を代表するものではありません。

国際緊急援助隊ニュースリリース  
http://www.jica.go.jp/activities/  
jdr/index.html  
御意見・御感想は Nomura.Rumiko@jica.go.jp まで。  
(関連写真は表紙裏のカラーページにもあります。)



供与式で覚書に署名する富岡副団長